

「杵築古写真」(大分県公文書館)



「杵築古写真」(大分県公文書館)

# 1 七島いとは

「七島いの植え付け」: 写真上

大正から昭和初期に撮影された、杵築市(当時の杵築町)の七島いの植え付け作業風景です。七島いの苗は機械植えには向かず、現在でも写真と変わらない手植えです。

#### 「七島いの刈り取り」: 写真下

植え付けと同時代に撮影されたと思われる、七島いの刈り取りの様子です。刈り取りは、今も昔も夏場のもっとも暑い時期、茎がまだ朝露に濡れている間に行います。

## (1) 七島いの伝来

豊後(大分県)に七島いが伝来したのは、1660年以降です。伝来には、府内伝来説と日出伝来説があり、 どちらも鹿児島地方の七島苗を持ち帰っています。持ち帰られた苗は、府内藩(大分市)・日出藩(日 出町)・杵築藩(杵築市)などによって栽培が奨励され、別府湾沿岸の地域に急速に広がりました。

### 府内伝来説

府内の商人橋本五郎右衛門(五郎左衛門という場合もあり)は商用で訪れた薩摩(鹿児島県)で、琉球産の草莚の美しさと丈夫さに驚きました。

五郎右衛門は、苗を手に入れるため、寛文3年(1663)に琉球へと向かいましたが、途中、風雨のために小さな島に漂着しました。これが七島(トカラ列島)であり、七島いの栽培地でした。彼は、苗を持ち帰ろうとしましたが、島外への持ち出しが許されなかったため、竹筒に隠し、持ち帰りました。しかし、栽培方法がわからず枯らしてしまい、寛文5年(1665)再び、七島に赴き、栽培技術を習得し、さらに一人の島民を伴い、また竹筒に隠して苗を持ち帰りました。持ち帰った苗は、島民の指導のもと大分郡内成村(由布市狭間・別府市)で栽培され、特産品となりました。

大分市には、五郎右衛門の業績を称え、産業振興の神として祀る青島神社が明治14年

(1881) に建立されています。



青島神社 (大分市三芳)

## 日出伝来説

きのしたのぶとし

日出藩初代藩主木下延俊のとき、領内の鶴成金山(杵築市山香町)で働いていた鉱夫の中に薩摩から来た者がおり、納屋に出身地で作られている七島莚を敷いていました。日出藩金山奉行であった長谷川久頓がこれを目にし、早速、延俊に七島莚の導入を申し入れましたが断られ、二代俊治のとき、再び建白し、導入が認められました。

万治3年(1660)、久頓の子伝兵衛が命を受け、八坂村(杵築市・日出町)と藤原村(日出町)の農民をつれて薩摩に渡り、一年がかりで、栽培方法と製織の仕方を習い、苗と織機を持って帰りました。この時、藩主は二代俊治から三代俊長へとかわっていましたが、俊長も七島いの栽培を奨励し、藤原村に試験田を設け、肥料を支給しました。その結果、四代俊量の時には量産体制が整い、品質も向上し、販路も開けたため、農家の主要な副業となりました。



俊長を祀る横津神社 (日出町藤原)

### 杵築への伝来

日出藩で七島いの栽培を奨励した、三代木下俊長が重い病におかされた時、神に平癒祈願のための 千本の通し矢を奉納することになりました。そこで、弓の達人として知られていた杵築藩森永手永の 大庄屋森永五郎右衛門を招いて通し矢を奉納させました。

五郎右衛門は見事に奉納し、賞品として太刀と七島いの苗を与えられました。この苗を育て、杵築 藩主松平英親に献上したところ、直ちに杵築藩内での栽培が奨励されました。七島いの栽培は急速に 広がり、三代重休の頃には日出や府内に勝る全国一の産地となっていきました。

また、杵築城下の伊予屋兵左衛門という、後に莚問屋として史料に登場する商人がおり、彼が府内 藩の青莚の見事さに驚き、橋本五郎右衛門に栽培方法等の教えを請い伝えられたという府内伝来説と 関わりのある説もあります。

#### せいえんじんじゃ 七島いの総社一青筵神社一

昭和11年(1936)10月、現在の杵築市城山公園内に七島莚の振興に功績のあった人々を祀る青筵 神社が建立されました。祭神は、松平杵築藩初代藩主である松平英親、三代松平重休、日出藩三代藩 主木下俊長、府内商人橋本五郎右衛門の4柱です。昭和42年には、市内の英霊911柱を合祀しました。 社殿の建立には、当時の七島いに関わる地元業者が中心となり、全県下から寄付が集まりました。 神社境内では、毎年10月、七島いの織り比べや品評会が開かれ、全国の莚問屋が訪れました。

昭和29年(1954)には城山に上る入り口に、地元問屋であった吉見商店(植木文蔵商店)を願主 とした大鳥居や西川甚五郎商店(昭和15年)による灯籠が建立され、今でも信仰され続けています。



青筵神社社殿



大鳥居



## (2) 七島いの特性

七島いは、主に畳表の原料として使われる東南アジア原産の植物です。長さが 150 c m以上、太さ が均一で湾曲が少ない茎 (断面が三角形) を半分に分割し、畳表の材料として使います。

七島いという名称は、鹿児島県本土の南に位置する口之島・中之島・平島・諏訪之瀬島・悪石島・小宝島・宝島の7つの島からなるトカラ列島(鹿児島県十島村)に自生していたことから名付けられたと言われています。

七島いは、亜熱帯性の植物のため、高温で生育が旺盛になりますが、低温には弱い植物で、地下茎という土の下で伸びる茎を株分けして増やします。冬の間に 0℃以下の日が数日間続き地面が凍結すると、地下茎が被害を受け、出芽不良や苗不足を招くため、七島いの栽培地には年間の平均気温が15℃以上で、0℃以下の日が続かない温暖地がよいとされています。また生育には多少の塩分があると良いとされ、八坂川のようにもともと塩分を含んでいる水質をもつ杵築地域は、七島い栽培が最適な土地だったといえます。

#### トカラ列島の位置



#### 七島いといぐさの違い

項目	七島い	いぐさ				
植物学的分類	カヤツリグサ科	イグサ科				
原産地	東南アジア	インド				
気候区分	熱帯・亜熱帯性	温帯性				
茎の断面	三角形	円形				
生態	高温短日性	高温長日性				
植え付け時期	5~6月	11 ~ 12 月				
収穫時期	8~9月	6~7月				
作業の特徴	茎の分割	茎の泥染め				
生産県	大分県のみ	熊本県・福岡県 ほか				

「七島い栽培・加工の手引き」より



七島いで織った畳表



七島いの断面



七島いの苗

## 科学的に証明された耐久性

七島いで作られた畳表は昔から「いぐさは3年 ほどで駄目になるが、七島いは 10 年は持つ」とい われるほど丈夫で長持ちするので柔道畳などにも 使われてきました。また耐火性も高いとされ、炭 鉱や養蚕を行う農家で重宝されました。

実際に、大分工業試験場や大分県藺業指導所の 実験により七島いの耐久性が証明されています。

曲疲労強度並びに磨耗強度試験では、七島い 10 本といぐさ 20 本の強度を比較したところ、七島い はいぐさのおよそ 5 倍以上の強度があり、磨耗抵 抗熱による疲労切断試験では、七島いはいぐさに 対し約6倍強いという結果が出ています。

さらに炭火による損焼比較試験では、いぐさの 畳表は 15 秒で裏返しも不可能になるが、七島いの 畳表は、いぐさと同じ状態になるまでに 50 秒を要 し、2倍以上の耐焼性があることがわかっています。

#### 曲疲労強度並びに磨耗強度試験

種類	七島い(10本について)		七島い(10本について) いぐさ(20本について)	
試験	曲疲労強度	磨耗強度	曲疲労強度	磨耗強度
平均値 (回)	1472	548	350	110

(大分工業試験場)

#### 磨耗抵抗熱による疲労切断試験

種類	七島い	いぐさ
平均値 (秒)	120	20

(大分工業試験場)

#### 炭火による損焼比較試験(昭和31年)

	経過時間(秒)	
重衣の無けた性及	七島畳表	いぐさ畳表
眼にほとんど感じない程度	1	
畳表がやや黄味を帯び注意せねば わからない	2	
畳表を焦がしたと思う程度	3	1
畳表を削ればごまかせる	5	2
畳表を削っても白味が露出し、焦げ 跡がわかる	10	5
たて糸を焦がし、それから折れてくる		10
裏面にもかすかな黄味を帯ぶ	30	13
裏返しても黄味の部分から折損する	50	15
畳表を抜き通し床までも焦がす	炭火は消える	20

(大分県藺業指導所)

## 七島いの現状

現在、七島いを栽培しているのは、国東市で活 動する、くにさき七島藺振興会のわずか 10 軒の農 家のみとなっています。

徹底的な品質管理を行うことで、上質な七島い を栽培し、これを使った畳表や工芸品は昔のもの とは比較にならないほど洗練されています。

世界農業遺産に認定され、改めてブランドとし て認識された七島いの畳表には、毎年 1 万枚以上 の注文があり、新たな地域活性化の可能性をもつ 特産物として期待されています。



刈り取りの様子(くにさき七島藺振興会)

## 豊後の名を冠した畳表

江戸時代の農業は、それまで中心であった稲作だけでなく、綿や砂糖など、それぞれの土地にあっ た特産品の栽培が積極的に行われました。かつて豊後国と呼ばれた大分県の各藩では、ロウソクの 原料である櫨の実、紙の原料となる楮、畳表の原料となる七島い、現在でも特産品である椎茸など が作られていました。この中で七島いで織った畳表は、「豊後表」「豊後の青表」と呼ばれ、国の名 がつくほど有名な豊後国の特産品として全国に知られていました。

江戸時代の農学者大蔵永常著書『広益國産考』には、当時上品とされていた備後表に対し、豊後 表は丈夫で8年はもち、庶民の間に広く普及しているとあります。豊後では大分郡乙津、森、原、 高松の近村、府内城下の付近、速見郡浜脇、別府、日出城下、杵築城下の近村、国東郡が栽培地であり、 豊後表によって得られる金子は計り知れないとも記されています。

## 日本三大農学者

大蔵永常は、江戸時代後期に活躍した農 学者です。明和5年(1768)、隈町(日田市) の農家に生まれた永常は、少年期に体験し た飢饉により、農民が苦しむ姿を目のあた りにしたことで「豊かな農村の実現」を目 指しました。青年期に故郷を離れ、93歳で 没するまで、日本各地の農業技術などを学 び、多くの農書を残しました。

永常の研究方法は、実際に現地に行き、 自ら聞き、確かめ、習得するというもので した。また栽培するだけで終わるのではな

く、加工や 販売方法ま で模索しま した。



大蔵永常像(日田市中央公民館)

## 集大成『広益國産考』

『広益國産考』は安政6年(1859)に出版 された大蔵永常の集大成といえる農書です。

全8巻から成り、「国の経済を豊かにする には、まず民を賑わし、その後に領主の益 となることを考えるべきである」という冒 頭に始まり、60種以上の特産品と成り得る 作物などを示し、その栽培方法等を記して います。文章には平易な語句を使用し、漢 字にはふりがな、作物や農具の挿図、進ん だ農業技術の絵図の挿入など、多くの農民 に読んでもらうための工夫が随所にみられ ます。特に第三巻では、「席草」という項目で、 内容のほとんどが七島いに関することです。



『広益國産考』(大分市歴史資料館)

## 永常が見た江戸時代の七島い栽培

### 「藺田耕し様」

藺田は深田で、人のへそより上まで沈みこむので、周りに一尺(33 cm)から一尺二寸(36 cm)の大竹を二本ならべ、これを足場にして、鍬で耕しては、竹を向こうにやって進む。

#### 「植付け仕様」

苗を植える二、三日前に耕した田を乾かし、 肥料と水を合わせたものを田一面に撒き、さら に乾かす。その後、水を入れて稲を植えるよう に植える。

#### 「席草(七島い)裂き様」

裂き方は、針金を張った木の台を作り、左手に藺の元を  $2 \sim 3$  本持ち、針金にかませる。これを  $3 \sim 4$  度すれば 10 本ほど針金にかかる。これを一度に引けば、いさぎよく裂ける。

#### 「裂きたる藺の干様」

裂いた藺は、短い芝生か堤の土手などの草の生えた上に干せば、藺の色は青い。乾いた藺が長い時は末を切りすて、棚に架けて干す。よく乾いたら取りいれ、蒸れない場所で保管する。

#### 「織筵算斗(むしろをおるつもり)」

筵一枚に使う、干藺、五貫(18.75 kg)を 一束にする。

織る速さは、一日2枚織れれば一人前である。 さらに夜なべをして1枚織れば合計3枚になる。









